『無常への試み』に向けて

191C00073 文学部哲学科3年　　内山栞

はじめに

来年度に迫る卒業論文制作について、無常という思想を中世・近代文学研究者である唐木順三（1904-1980)の思想を下地に執筆する意向である。本稿では前期のレポートに引き続いて、論文内容の詳細を明示するとともに、それがどのように帰結するか、結論を概略のみでも提示したい。

本稿において参考及び引用に用いる文献、論文を以下の通り予め示しておく。

『唐木順三ライブラリーⅢ　中世の文学/無常』(2013)の『無常』
『唐木順三全集　第三巻』(1967)から『現代史への試み』より「十四　新しい幸福論のために」
『唐木順三全集　第九巻』(1968)から『朴の木』の「三十六の随想」より「科学者の社会的責任の問題」

また、『全集』を引用するにあたっては、筆者内山が旧字体を新字体に改めている。

第1章　論文概要と内容整理

第1節　卒業論文内容の具体的な提示とその説明

卒業論文制作の第一歩として、昨年10月末に「卒業論文計画書」なるものを提出した。本節では、計画書にて書いた論文の流れと、それに関しての詳しい内容説明をする。予定している表題は『無常への試み-無常は如何にして克服され得ないのか-』であり、以下は現段階で定まっている目次である。

はじめに

第1章　このごろ思うこと

第1節　昨今の世の情勢に関して自身が思うこと
第2節　唐木の生きた時代と現代との比較

第2章　無常なる世の中

第1節　『無常』の概要

第3章　無常への試み

第1節　無常の分析
第2節　無常の克服
第3節　反論－無常は克服され得ない
第4節　我々はどこへ向かうか

おわりに

第1章は2つの節から成る。「このごろ思うこと」と称して、現代がどのような状況となっているのか、筆者が思うところを述べるとともに、唐木の文献を扱い、彼の生きた時代と現代との比較を試みる。

第1節では筆者が日頃感じていることを取り上げ、自身の観点から世の実情について述べる。具体的にこのごろ「どことない不安」が多くなったが、それはどこに起因するものなのか。さまざま思い当たる点がありすぎる中で、殊にこの先就職の道が待っているが、それは「たかが知れている生涯」であるとか、その根本に資本主義構造の問題があるとか、さらに派生して、各国の最先端技術開発競争の激化、それらを原因とした環境問題などが挙げられる。そういった具体的な社会問題について思うところを存分に述べたいと思う。

第2節では、唐木の文献を扱い、彼の生きた当時と、現代との比較を試みる。と言うのは、唐木が文筆家として活躍していた真っ只中、日本、そして世界は戦後の殺伐とした空気から現代につながる動きが多く見られたわけである。中でも特に注目したいのが、「科学者の社会的責任」の所在についてである。

ここからは具体的に、唐木の論文「科学者の社会的責任の問題」(以下「科学」と略す)を紹介し、この問題がどれほど現代に重要な意味を持っているかを述べる。

1957年7月7日、「科学と世界の諸問題に関する会議」いわゆるパグウォッシュ会議が開かれた。この会議は全ての核兵器及び全ての戦争の廃絶を訴える科学者による国際会議である。ここでは、三つの委員会に分かれて、5日間にわたって討議の末、その結論を声明書として発表した。その中で唐木は「科学者の社会的責任」を討議した第三委員会の声明を最も注視している(唐木「科学」p.25 l.1-5)。

> 私は、もちろん、科学者たちが、科学以外の領域にまで責任を感じ、「恒久的且つ普遍的平和の確立」に助力することを「最高の責任」だといっていることに敬意を表するものだが、同時に、この声明自体のうちに、現代の危機の深さと、現代という時代の混乱を感ぜずにはいられない。（唐木「科学」p.25 l.6-8）

戦争によって我々人間は生命を脅かされ、殊に日本という国においては広島・長崎での原子爆弾投下によって、甚大な被害を被った。ここで言われている「科学以外の領域」とはそうした、科学や技術の発展によるその分野以外での弊害、「社会的責任」のことである。唐木は、科学者たちがこうして「科学以外の領域」にまで責任を感じ、普遍的平和の確立に助力することを称賛している一方で、声明それ自体に、「現代の危機の深さ」と「現代という時代の混乱」を感じているという。一体どういうことであろうか。

> 私はかねがね、真、善、美という価値体系が崩壊してしまったことが、近代ニヒリズムの根本原因だと思ってきた。いわば科学的真が、善、美を圧伏して独走してしまったことが、近代という時代の性格であると考えてきた。そして、この近代ニヒリズムを超える道は、失われた価値体系をとりもどすことにあると考えてきた。そのためには、真、善、美の統一原理として、幸福というものを、深いところから考えねばならぬと思っている。そして、このことと、科学者のいう真理のための真理、外部からの干渉の排除、つまりは科学精神の自由の問題をどう考えるべきかに思いなやんでいる。「科学と技術の進歩の非可逆」ということと、人類全体の幸福、人間の幸福ということの結びつきの問題に苦しんでいる。(同上　p.27 l.7-13)

声明書の提言の中で、科学者たちは「科学はそれが外部からのいかなる独断にも干渉されず、自由であるとき（中略）もっとも有効に発展」(同上　p.25 l.10-11)することがいわゆる「科学精神の自由」であることを示し、なおかつ「科学や技術の発達は、すべての人類の未来に至高の重要性をも」(同上　p.26 l.2-3)つこと、「科学の進歩は非可逆性である」(同上　p.26 l.3)ことを述べた。だが、原子核エネルギーという科学の申し子が、著しく人類の生命を脅かしたことによって、彼ら科学者たちは同時に「社会的責任」を問題にせざるを得ない事態となったのである。

委員会はこうして、人類の福祉に役立つことが科学的理性のとるべき姿であるとも示している。即ち、人類の進歩に貢献することが可能ならば、科学は肯定されるべきということである。

しかし唐木は苦悶する。上記引用の通りである。必ずしも科学や技術の「非可逆的進歩」が直ちに我々の真なる幸福に結び付けられるとは限らない、と悩んでいるのである。

そして、我々の生きる現代、つまり21世紀はどうであるか。やはり、唐木が懸念していた科学の進歩と人類の幸福の両立の怪しさが露呈するに至った。そのもっともな出来事が2011年3月11日の福島第一原子力発電所の水素爆発事故である。

事故直前までの長年にわたって、日本では原子力発電が「安全神話」なるものによって肯定されてきた。少ない燃料で膨大な量のエネルギーを生み出すという、この国の資本主義構造による多大な生産と消費のサイクルにはこれ以上ない魅力的な基盤であった。だが、大規模な事故以来、人類の真なる幸福追求と科学によってもたらされる肯定的な福祉の在り方、その結びつきの矛盾性が一層表面化されたのであった。

卒業論文では今回取り上げた、科学の進歩と人類の幸福の両立を始めとする社会問題を多角的に取り上げ、唐木の生きた時代と現代とを比較する。そして昔も今も、無常な世の中である、ということを提言する。

第2章「無常なる世の中」では、論文の核となる唐木の文献『無常』を取り上げる。唐木にとって無常とは何であるかを汲み取るのがこの章の狙いである。論文『無常』はのちに唐木の集大成とも言われることとなる代表作である。その論文では、無常が如何にして無常となったのか、その謂れについて論じられている。キーワードは「世」である。具体的に中世・女流文学（主に平安・鎌倉時代ごろ）において「世」は、男女の仲のことであった。そしてその哀愁さを「はかなし」という言葉で表現していた。しかし、時代が変遷し時は動乱、戦の世となる。その時代においてはもちろん「世」が男女の仲を意味するはずもなく、殺伐とした世界のことが「世」となる。戦においてはただ「死」が決定されている。唐木曰く「自他をも含めての事実、根本的事実、根本的範疇」が無常であることを以前に執筆したレポート（2年次後期「日本思想史2」）で述べた。そういった無常は如何なる際に生じるのであるか。それは、殺伐とした世、即ち動乱、戦の禍中においてである。動乱の禍中では、想像を絶する殺伐とした空気が流れている。その時、もはや自分の感情がどうとかいう問題ではないであろう。面前にありありとただその「光景」が迫ってくるのみである。こうした、単に詠嘆的、哀愁的に「世」を表現できない事態によって、「はかなし」とは区別されるもの即ち無常が起ったのである。卒業論文では、さらに『無常』について考察を深めていく所存である。

第3章については、今回の都合上、簡単な内容説明に留めておくこととする。第3章「無常への試み」は4つの節から成る。第1節では第2章で考察を深めた『無常』の文献中の時代、唐木の生きた時代、そして現代を比較する。第2節では、第1節を踏まえて無常が如何にして克服されるのか、その手立てについて探りたいと思う。第3節では、第2節へのアンチテーゼ「無常は如何にして克服され得ないのか」を論じる。無常はそもそも克服されず、ただ世の中は時が過ぎ去っていくのみである、という主張を定立したい。第4節では、第3節で示した無常がなぜ克服され得ないのかを踏まえ、我々現代人がこれから生きてゆくにあたって、どうあるべきか、その具体的な策、いわば、「現代の処方箋」なるものを講じる。これについてはこの後の「現時点での論文の終着点について」で改めて詳しく述べることとしたい。

次節では、具体的にどのような謂れで世の中が無常であるかを論じる。この問題提起は、これから卒業論文に着手するにあたっての内容整理の一環でもある。

第2節　世の中が無常であることの何が問題か

無常とは元来仏教用語である。「一切のものは、生じたり変化したり滅したりして、常住（一定のまま）ではない」という意味を持っている。また、そこから派生して「人の世がはかないこと」といった意味も持っている。言ってみれば、世は無常であって至極当然である。我々人間たちは、生まれ、そしてやがて死ぬ。そうした観点から既に「常住」ではないし、個々人の生から死までの長い期間においても、決まって他者と出会い、いつかは別れる。さまざまな出会いと別れ、生と死はそれ自体として決定づけられているが、恒常的ではない。常に変化あるのみなのである。

唐木は論文『無常』にて、こう述べている。

（前略）無常は単に客観的対象ではない。自己もまた無常の中にある。無常は反って主体的事実である。

また無常は、「はかなし」という心理の上にあるのでもなく、無常感という情緒の上にあるのでもない。反って無常は自他をふくめての事実、根本的事実である。（中略）無常は事実であるとともに、唯一の範疇、根本的範疇である。（唐木『無常』p.480 l.5-9）

無常とは「自他をも含めた根本的事実」である。それゆえ「はかなし」や無常感といったような心理的情緒とは区別される。また、厳密に言うと、無常「観」とも違う。というのは読んで字の如く、無常観は無常を「観」している、つまり、一側面からの視点による無常に過ぎないのである。したがって無常は、「はかなし」や無常感、無常観の要素を凡て含むとともに、区別されるべきものでもある。

以上を踏まえると、一体世の中が無常であることの何が問題なのか、という疑問が湧いてくるであろう。元来世の中は「常住」ではない。いつ如何なる時も無常なはずである。

筆者は、そうした無常が、無常としてそのままに迫ってきてしまう、ということが問題なのではないかと考える。冒頭でも述べたように、常住ではないことが世の常であるとしても、本来は感性が優位的に働くのが普通であろう。個々人で見れば、「嬉しい」とか「楽しい」「悲しい」といった感性は確かに正常に働いているのかもしれない。しかし、ここで問題意識を向けているのはそうした次元のものではない。社会規模の感性である。

時代は資本主義となり、上に立つものと下にいるものとの力関係によって成立する社会となった。あらゆる選択肢の幅が格段に広がり、どこに生き甲斐、価値を見出すかについて縛られることも無くなったわけである。遥か昔、人々は日々の信仰を生き甲斐としていたが、現代においては、自分自身の「生き方」そのもので以って各々が存在を存在たらしめている。だが、そのわりに社会を挙げて不安がある。ただ漠然とした不安である。その不安な世界、即ち無常ゆえに我々は「有常」を求めようとする。

人は絶対的、持続的、安定的、という言葉に弱い。世は決まって無常であるが、分かっていても我々はその希望を常に抱いている。そうであるからして、技術開発の促進、最先端医療の実現化がもてはやされているのである。あるいは、自国の国家権力、戦闘力の誇示のために、武器保有で以って「絶対的」な権力を見せつける。

だが、無常なる世界、厳密に言うと無常が無常としてそのままに迫ってくる世界において、「有常」を求めることは意味を成さない。

（前略）「無常」は、今日では世界的な意味をもつ、またもちうる内容があると、私は思う。（中略）今日ほど「無常」の事態を眼前にさらけ出している時は、そうざらにない。現実の事態が「無常」なのである。言ってしまえば、ニヒリズムが普遍化し、すでにニヒリズムという実態が観念されえないほどに、ニヒリズムそのものが、のさばっている。ニヒリズムはすでに特定人の特定の主義や意見ではない。世界を挙げてニヒリスティックなのである。ひとはそのなかにありながら、それを意識しえない。その現実に、一見は不満はなさそうにみえる。いな、それをこそ新しい時代と思っているようにさえみえる。然し、根本のところでは、世界を挙げてこのことのために不安である。繁栄し、進歩すればするほど不安である。この繁栄、この進歩こそが、死への滅亡へのそれではないかという不安は世界の現実である。（唐木 『無常』p.253 l.13、p.254 l.2-9）

唐木は当時から無常が露呈している社会について危惧していたわけであるが、その現状は今現代も続いている。無常なる世の中において世界が「有常」を求めて奮闘する。「有常」とはそもそも存在し得ないのだから、そこへの注力も無意味である。だが、現代においてはその理論はもはや通用しない。通用しないが故に、着々と技術開発、その競争の激化は進んでゆくのである。「この繁栄、この進歩こそが、死への滅亡へのそれではないかという不安」(同上　p.254 l.8-9)、上記の引用通り唐木はそう述べているが、筆者自身も同様に危惧している。我々は一方で、繁栄しつづける社会、世界を追求しているが、他方ではそれがひたすらに破滅への一歩を着々と歩んでいるのではないかと思うのである。

この実情を克服するすべはないと現段階では思っている。もはや何も手立てはない。それは、この社会構造であったり、我々人間の、進歩への飽くなき欲求に起因するものである。それを一体誰が止められようか。誰にも止められない事態にまで現代は陥っているのである。では、そういった社会においてどのように生きてゆくのが望ましいのか。それを卒業論文における結論として掲げたい。

次章第1節では、以上のことを踏まえて、現時点での論文の終着点について論じる。具体的に、無常を克服することが出来ないのであれば、我々はどのように生きてゆくべきか、「現代のニヒリズムに対する処方箋」なるもの、その概略について述べたい。

第2章　来（きた）るべき卒業論文制作のために

第1節　現時点での論文の終着点について

前章第2節では、如何に現代が無常であるのかについて論じた。科学的真の凌駕によって、真善美の価値体系が均衡を崩し、その事態が現代まで続いている。一方で、資本主義産業の発展や、最先端技術の着実な進歩によって、我々は物質的な豊かさを獲得している。現代の社会構造においては、この物質的な豊かさを以って人々の「豊かさ」に繋がっていることは否定できない事実である。他方、こうした繁栄のための技術開発の進歩、競争の激化が、着々と我々の生きる世界の破滅へと歩みを進めているのではないか、という矛盾が明らかとなった。だが、こうした無常を克服する手立てはない。

では、我々は無常なる世の中においてどのように生きてゆけば良いか。現段階においては、その終着点が確固たるものとなってはいないが、今の時点における結論を示したい。

端的に言うと、この事態を受容する、ということがもっとも望ましい。この社会構造、代々の積み重ねによって事態は生じている。したがって現代のこの状況に個々人が抗うということは無意味に等しい。

『現代史への試み』の「十四　新しい幸福論のために」(以下「幸福論」と略す)で唐木は、科学発展と人類の幸福の両立のあり方について論じている。もはや、科学や技術の発展は人類の幸福、文明の進歩のためだとは言えなくなったのではないか。科学的真が幅をきかしており、真善美の三者の価値体系の崩壊こそが現代の特質、また混乱の由来である(唐木「幸福論」pp.310-311 l.14-2)。

真善美が均衡を保った上で成立するには、そこにかなめとしての重心を要する。古くヨーロッパでは神がその役割を果たしている。だが、近代においてはこの神（もしくはそれに値する存在）の不在証明に始まっているのである。神という最高権威の喪失は価値の無秩序化を生み出し、ニヒリズムというものを呼び起こした(同上　p.311 l.8-12)。ニヒリズムという言葉は以前にも出てきたが、これは「神の喪失」によって、人生、世の真の姿、事実がそのままに露呈することを示す。

唐木は現代の状況について、「哲学者や人道主義者がいくら論議しても、現在の機構、近代産業のうみだした物質的繁栄をもって幸福とする前提のある限り、新しい幸福論は現実の力としてはでてこない」(同上　p.313 l.16-17)と述べている。現時点での解決する糸口はないのである。だが、以下の引用箇所にて一つの兆しが見られたようにも思う。

（前略）近代の価値体系の崩壊のうみいだしたニヒリズムは新しい人神の設定によっては超えられないということ。その証明のために、近代はいくたの犠牲、たとえばヒトラーの所業の如きを払ってきた。
ニイチェは仏教を受動的ニヒリズムと断じて、ツァラトゥストラを設定したが、むしろ受動性のうちにこそ、ニヒリズムを超える道があるのではないか。ニヒリズムを無の方向へ徹底化する方向に、かえってそれを超える道があるのではないか。(同上　p.315 l.7-11)

唐木は「幸福論」の後半で、近代の「病患」即ちニヒリズムを脱するための二つの問題を提起している。そのうちの一つが上述した通りである。ここに、何か解決とはいかないまでも、「緩和」の光が感じられる。ニーチェは「神は死んだ」と言い、ツァラトゥストラという人神の誕生を宣言したが、そうは言っても、人神が近代、現代の価値体系の崩壊を克服することは望めない。ヒトラーの独裁体制によって人々が窮地に陥ったことからも窺い知れるであろう。ニーチェは仏教の特性を受動的ニヒリズムとして切り捨てたわけであるが、唐木はその受動性にこそ、「ニヒリズムを超える道がある」と述べている。

以上を踏まえ、改めて論文における現段階での結論を示したい。これまで述べてきた世の事態に解決の手立てはないのであるが、一つ、我々がこの事態を受動、受容するという道があると考える。ただ、ここで誤解を招くので、一点留意しておきたいことがある。受動、受容とは単に「人としての心を殺して甘んじて全面的に受け入れる」という意味合いではない。そうは考えていないし、おそらく、唐木自身もそのことを言っているのではない。能動受動の対立関係における受動をも超えた受動、受容に「ニヒリズムを超える道がある」のだと考えている。この手がかりとなるのが、やはり仏教思想であろう。そこにおいて我々が現代を生きてゆくすべが何らか見出されるのではないかと考える。

本節で問題とした結論は、卒業論文に着手するにあたって、先生と相談しながら、より良いものを目指す所存である。

第2節　今回露呈した課題について

本節では、本稿を執筆する中で自身が痛感した論文の問題点について論じる。

第一の問題点として、（本来の意味としての）無常と、無常が無常としてそのままに迫ってくること、それらとニヒリズムがどのように同じでどのように違うのかを明確化できていないことが挙げられる。また、無常の認識について唐木の見解との齟齬があることも同様である。近代産業や資本主義構造の発展によって、科学的真が真善美の価値体系を崩壊させたことを問題にこれまで論じてきた。そして人類の進歩、発展（もはや目的はそれをも超えているのかもしれない）のための技術開発が必ずしも、我々の真なる幸福追求には結びつかないということ。発展を目指すほどに、それが我々人類の破滅、滅亡へと導いているのではないかという矛盾性がある。そうした矛盾性を孕み、常に混沌とした「どことない不安」を無常として表現した。だが、厳密に言うと、本来の世のありようは無常（定住ではない）である。したがって、論文の正しい問題提起は、混沌とした世において、無常が無常としてありありと我々に迫ってきてしまう事態を克服することは可能か、である。そしてこれが、「神の喪失」によって、世の中の真の姿が露呈するという、ニヒリズム、及びそれを克服することと同義である。

唐木は無常を「自他をふくめての事実、根本的事実」であるとした。しかし、彼の見解においては無常が直ちにニヒリズムに結びつくような論じ方が見られ、見解の齟齬を感じている。先に述べたように、本来の世のあり方そのものは無常である。凡てが留まるところを知らず、常に変化あるのみである。したがって、この世のあり方即ち無常が直ちにニヒリズムに結びつくのは、甚だ疑問である。無常それ自体が問題なのではなく、世の在り方によって、無常が無常としてそのままに迫ってくる、ということが現代の問題であり、これがニヒリズムなのではないかと筆者は考えている。これについては、今後卒業論文執筆に向けて、また、執筆する中で絶えず考えていくこととし、それを以って唐木との、無常の解釈齟齬の解消に努めたい。

第二に、論文内で予定している第2章「無常なる世の中」の第1節「『無常』の概要」についてである。今回、第1章第1節で唐木の『無常』についてその概要をまとめたが、どのように論文に関わってくるのかをはっきり提示できていない。論文『無常』を礎にする予定であるが、それを中心部に置くことが如何に必要であるのか、明瞭さに欠けるのが現状である。この件に関しては、単純に『無常』の読み込み不足に由来するものでもあるために、引き続き『無常』と向き合いたいと思う。

終わりに

前期のレポート、「卒業論文計画書」執筆を踏まえ、本稿では、文献を参照しながら如何に我々が無常の窮地に陥っているか、そして無常が克服されない現代において我々はどう生きてゆくべきか、現時点での結論を示した。主にこの2点の提示によって、幾らか前期のレポートからの発展を示すことができたのではないかと思う。

『無常への試み－無常は如何にして克服され得ないのか－』という論文の表題通り、無常が克服されないことの所以、そして我々が現代を生きてゆくためのすべ、即ち「処方箋」を提示することで以って、無常への「試み」を存分に発揮したい。

（総字数　8,795）

以上

参考文献

唐木順三　『唐木順三ライブラリーⅢ　中世の文学/無常』解説　粕谷一希　中公選書　2013年9月10日初版発行

『唐木順三全集　第三巻』筑摩書房　1967年8月25日発行

『唐木順三全集　第九巻』同上　　1968年2月25日発行